

バ  
ビ  
ロ  
ン  
I

—  
女  
—

## 野崎まど

Nozaki Mado

東京地検特捜部検事・正崎善<sup>せいざきぜん</sup>は、製薬会社と大学が関与した臨床研究不正事件を追っていた。その捜査の中で正崎は、麻酔科医・因幡信<sup>いんぱしん</sup>が記した一枚の書面を発見する。そこに残されていたのは、毛や皮膚混じりの異様な血痕と、紙を埋め尽くした無数の文字、アルファベットの「F」。正崎は事件の謎を追ううちに、大型選挙の裏に潜む陰謀と、それを操る謎の人物の存在に気がつき……。

「いやいやいや正崎さん。これはきつとかなり、相当に重要なメモですよ」

文緒がA4のペラ紙を持ってきて差し出す。正崎は半信半疑で紙を受け取った。《製造販売後調査に関する申請について》というタイトルがついた印刷物だった。

パツと見ただけでも明らかに重要度の低そうな書類であった。まずタイトル横に発行者として記されている『聖ラファエラ医科大学』はアグラス事件渦中の四大学ではない。次に書類の内容が単なる注意事項で「ホームページから申請書式をダウンロードしてください」「申請は十三時から十七時の間に窓口へお越しください」等の瑣末な注意程度しか書かれていない。製薬会社のオフィスの片隅にあったというだけの、本事件と一切関係のないような紙ペラだった。

「で、メモってどれた」

「これですこれ」

文緒が紙の下方の端を指でさす。そこに小さく、ボールペンの殴り書きで。

F

と書かれていた。

文緒は正崎の机に両手をついて興奮気味に乗り出した。

「僕が思うにこれは何かの符牒……つまり暗号ですよ正崎さん！」

「これが何を表してるって」

「そう、F……Fですからね……F……フリー……いやフランス……？」

正崎は仏のような顔をした。確かに手書き文字から想像力を働かせろとは言った。だが限度というものがある。こんな小さなアルファベット一文字からすべての可能性を考え始めたら何年経っても物読みは終わらない。

〈中略〉

「文緒」

「はっ」

「しばらく数字の方だけ当たれ」

文緒はガクリと項垂れた。首を傾げておかしいなあと呟く。未だ納得のいかない様子の文緒に正崎はペラ紙を返した。その時に紙の裏側の黒い面が見えた。そこでふと止まった。

コピー用紙の裏側が黒い？

正崎は紙を裏返した。

「あれ、なんか変な紙ですね」

二人は妙なコピー用紙の裏側を数瞬眺めた後に。

同時に気付いた。

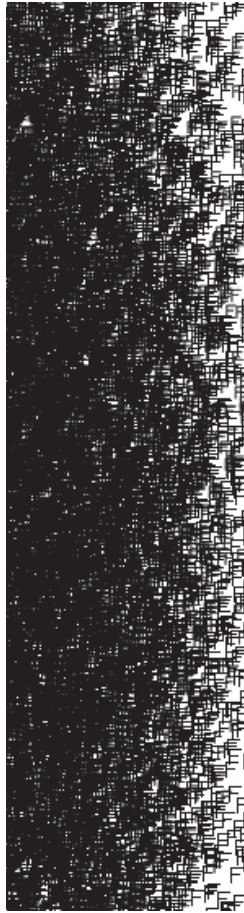
「ひう」

文緒が息を吸うような小さい悲鳴を上げた。

正崎は反射的に手を離しそうになり、それを意志の力で押し止めた。

その白い紙には、まるで小さな虫のようにびっしりと。

字が書いてあった。



「F」だった。

それは無数のFだった。ほぼ同じ大きさで、ほぼ同じ方向を向きながら、ただひたすらに何千回何万回と、白い紙を黒くするまで、Fの一字がぎちぎちに書き込まれていた。

文緒があまりの異様に後ずさった。正崎は半分無意識的に、その黒い一面を指先で撫でていた。インクが付くかと思っただのかもしれない。

だがそこから得られた情報は、予想と大きく違った。

ザラ、とした感触があった。奇妙な手触りだった。それはサンドペーパーのような均一さではなく、妙に不規則で、ごく薄い抵抗だった。正崎は紙に顔を寄せて目を凝らし、その手触りの正体を確認した。

一つは、何本かの毛だった。

一つは、爪の端のようなものだった。

一つは、フケのような、皮膚のかげらのようなものだった。

きちんと調べてみなければ確証は得られないが、どうもそれは、人から脱落した組織のようだった。それらが紙の上で文字に混じって固まっている。どうやって固まっているのかはもう明白だった。

血液。

真っ黒の文字のせいですぐにはわからなかったが、インクの黒の上に固まった暗赤色が

混じっている。量はさほど多くない。ところどころに付着した僅わずかな量の血が固まり、それに毛や爪のようなものが混ざりこんで、人が触り慣れない、おぞましい手触りを生み出していた。

「なんなんです……」

文緒の顔から血の気が引いている。頭で処理しきれない感情が顔にこぼれ出して表情を歪ゆがませる。

「正崎さんっ、なんなんですかその紙……ッ！」

「わからん」

正崎は、その圧倒的な情報量を持つ紙をつまみ上げる。

「今の時点で一つだけ言えるのは」

正崎は頭の中で展開した無数の想像の中から、最も間違いのないだろう、紙を見た誰もが最初に解ることを口にした。

「これを書いた人間は、まともな精神状態じゃなかったということだ」



続きは本編で！